

積土は、大きく3層に分かれる。最下層に粗砂と細砂が縦状に流路底部に堆積し、水の流れのあったことが観察される。中層には黄色の細砂が、約0.4m堆積し、上層は、黄色泥砂が堆積している。上層内より古墳時代須恵器が出土している。またS D09は、S D07に北側の肩が切られている。

16区と9・10区では、ピット群が検出されている。それぞれのピットからは、特に遺物は出土しなかったが、No.16杭西北約2mで検出された径約0.4m、深さ約0.2mのピット内には、炭が多く含まれていた。

10区ピット群に、長径約1.8m、深さ約0.05mの浅い楕円形の土壌が検出された。土壌内堆積土は、炭を多く含む暗灰褐色砂泥である。

小 結 中世遺構及び古墳時代遺構は、建物等のようにまとまりのある遺構は検出されなかつた。しかしながら当初予想されなかつた中世遺構面の下層に、古墳時代遺構面の存在が確認された。

2トレンチ 宅原1号線より東の圃場への進入路を造成するため、法切りが行われることとなつた。宅原1号線の東側は、前年度調査分・下宅原遺跡辻垣内地区の連続性が予想される。このため3m×4mの削り取られる部分に関して発掘調査を行つた。

調査の結果、建物址と考えられる3か所2箇分（柱間距離2m）の柱穴とばかりに柱穴と考えられるピットが2か所検出された。出土遺物から、11～12世紀頃の掘立柱建物の一部と考えられる。

6トレンチ 丘陵のほぼ中央部に位置する調査区である。耕土・床土下に遺構面があらわれる。調査区西南隅には、約2cm程度の包含層が存在するが、他の部分には包含層は存在しなかつた。遺構は、調査区南半部に集中し、北半部には、検出されなかつた。南半部からは、18か所のピットと浅い落ち込み1基が検出された。ピット18か所のうち4か所のピットは、南西隅の落ち込み埋土を削除した後に、検出された。ピットは、直径0.2mと0.3mの2種類のものが検出された。

落ち込み状遺構の東側ピット内から、土師器破片が廃棄されたと考えられる状態で出土した。検出されたピットは柱穴と考えられるが、建物等としての性格づけは検討中である。

7トレンチ 耕土・床土下に盛土層が約0.2mあり、これらを除去すると灰色砂泥の包含層があらわれる。包含層からは、中世土師器片・須恵器片と青磁片が出土した。

包含層を除去すると調査区東西両端には地山層（遺構面）があらわれる。西部では、落ち込み状遺構とピットがそれぞれ1か所検出された。

東西地山に挟まれた中央部分は、幅約15mの谷状の落ち込みとなる。大きく2層に分層される。須恵器・鉢・塊・土師器片・鉱滓が出土した。

小 結 各調査区は、水田の突端部分に限られたため、盛地層等が多く遺構の存在し

ない箇所も見られた。しかしながら小面積の調査で遺物出土量も多くなかったが、柱穴群や鉛滓のような特殊な遺物を含む落ち込み状遺構が検出され、丘陵部には、かなりの遺構の存在をうかがわせる。

12トレンチ 尾根の突端部に設定した調査区である。南への拡張部は、18トレンチに予定される排水路の延長上である。落ち込み状遺構・土壙3か所・ピット約10か所が検出された。ピットは建物としてはまとまらなかった。土壙は、浅くまとまりのある遺物は出土しなかった。遺物包含層出土の遺物から14世紀代に入る遺構と考えられる。

16トレンチ 通称蓮花寺鼻の丘陵地内の小さな谷地に設定された調査区である。22トレンチと平行する。中世遺物包含層と地山面直上に、古墳時代の甕片が集積した状態で検出された。幅1m、長さ17mの規模の調査区であったため、甕片の集積等の性格は、不明であった。

19・20トレンチ 排水路及びパイプライン予定地に設定された調査区である。それぞれ幅1mで、長さ142mと長さ75mの調査区である。

調査区北半部では、中世の遺物包含層と比較的多くの遺物が出土した。

農道のT字路附近（21トレンチの東側）では、中世の溝2条と古墳時代の溝が検出された。また、この下層では弥生時代の遺物包含層が確認された。このため調査区は、一部拡張し、調査を行った。

中世の溝は、幅0.3m、深さ0.2mと幅0.2m、深さ0.2mのものであった。少量の中世の遺物が出土した。古墳時代の溝は、幅0.6m、深さ0.3mのものであった。溝内より古墳時代の須恵器环身と少量の土師器が出土した。

22トレンチ 北神中央線予定地東側と圃場とを画する排水路予定地に設定された幅1m、長さ約150mの調査区である。

地形的には、尾根状地のなかの小さな谷部に当たる部分で、南から北へ傾斜する。全体に中世遺物包含層が存在し、南半部では、中世遺物包含層下に造構面（地山）があらわれる。溝及び土壙・ピットが検出された。

北端部には、奈良時代の土器を含む、溝状の落ち込みが検出された。

先にも触れたが、調査区の幅が1mと限定され、それぞれの遺構の性格を把握することはできなかった。しかしながら下宅原地区で中世のみならず、奈良時代の遺構の存在を窺わせる資料が検出されたことは重要である。

14トレンチ

基本層序 蓮花寺鼻と呼称される丘陵の東半部に設定した約1,400m²の調査区である。南から北へ、また西から東へ傾斜する地形である。基本層序は、耕土・床上灰色泥砂・褐色泥砂・地山となる。灰色・褐色泥砂とともに遺物を包含し、地山面が造構面となる。

- 遺 物** 遺物包含層は、南半部が薄く、北半部が厚く堆積していた。特に北半の西部包含層からは、多量の遺物が出土した。灰色泥砂の下層に下層泥砂層が存在するが、特に時期差は見られなかった。
- 出土遺物は、古墳時代須恵器・奈良時代須恵器等を少量含むが、大半は中世遺物である。その内容は、須恵器壺・皿・壺・甕・鉢、土師器・鍋・皿・青磁・白磁片・天目茶碗・鉄釘等が出土した。
- 遺 構** 検出された遺構は、溝35条、土壙12基、ピット約200か所、落ち込み状遺構3か所、掘立柱建物2棟、井戸3基（うち2基は近世）、木棺墓1基等である。
- S B01** 調査区北西部に検出された建物である。東西棟の建物で、東西柱間1.5m、南北柱間2.1mの2間×3間の総柱建物である。各柱穴は、ほぼ同一規模で、径0.3m、深さ0.4mである。南辺の2柱穴からは、柱部材が検出された。他に柱掘形内より少量の土師器、須恵器片や根固めと考えられる拳大の石が出土している。
- S B02** 調査区東部中央に検出された建物である。南北棟の建物で、東西柱間2.0m、南北柱間2.0mの2間×4間の建物である。各柱穴は、全体に検出面が削平を受け、当初の規模を復元するには難点がある。径は0.2m、深さは0.1~0.3mである。柱掘形内からは、特に顕著な遺物は出土しなかった。
- S X01** 調査区東南部で検出された東西約9m、南北11mの落ち込み状遺構である。人工的な落ち込みではなく、自然の流路状の落ち込みに流入土が堆積したものと思われる。中世の須恵器、土師器片が出土した。なおS X01の上面には、6か所のピットが検出されている。
- S X02** 調査区南西隅部で検出された、長径2.5m、短径2.0m、深さ0.1mの不定形の落ち込み状遺構である。埋土は、包含層と同様の灰色泥砂で、土師器鍋片が約2分の1個体分細片で出土した。
- S E01・02** 調査区南西部で検出された遺構である。中世遺物包含層を切る中世以後（近世のものと考えられる）の水溜状の遺構である。両者ともほぼ同一規模のもので、径0.8m、深さ0.5mの円形である。特に出土遺物はなかった。
- S E03** 東部中央に検出された井戸状遺構である。径1.7m、深さ0.7mの規模をもつS B02との前後関係は不明である。遺物は、特に出土しなかった。段丘の疊層を穿ち下層の砂層に達していることから、かつては湧水があったものと思われる。
- S K01** 調査区南西部に検出された径1.4m、深さ0.2mの円形の土壙である。出土遺物はなく、性格は不明である。
- S K02** 調査区北東部に検出された長径2.9m、短径2.4m、深さ0.2mの不正円の土壙である。土師器鍋・須恵器壺・鉢・青磁片等が出土した。堆積状況より、水が

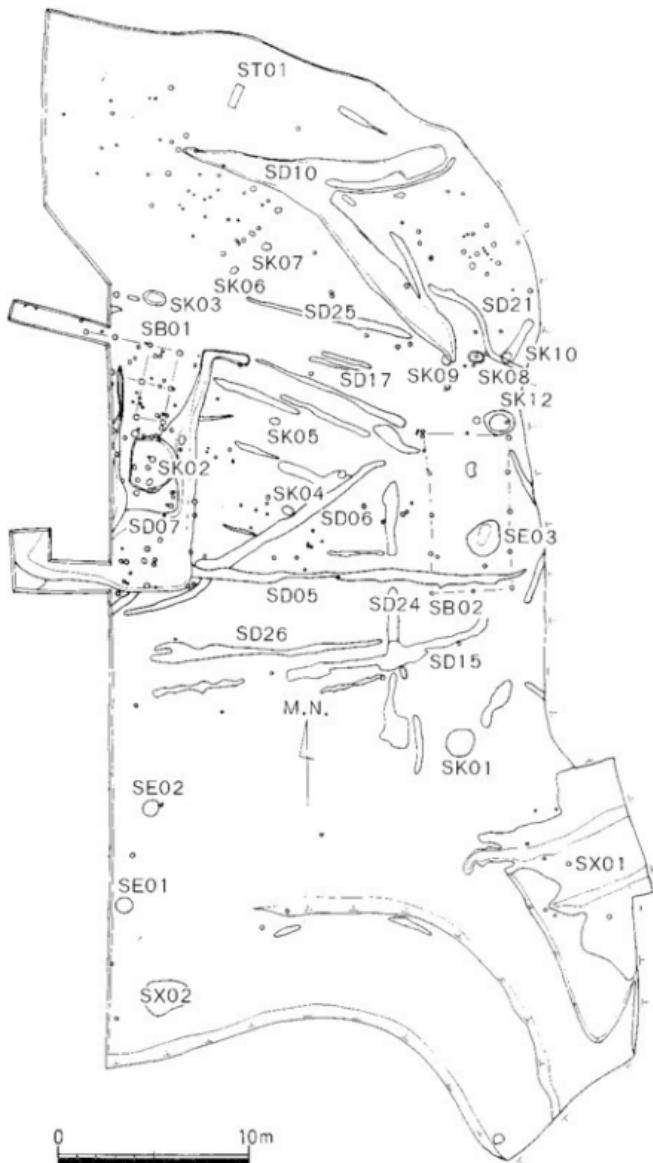


fig. 252-14 トレンチ遺構平面図

溜まり泥土化した後に、遺物とともに土砂が堆積したと思われる。埋土を取り除いた段階で、ピットが8か所検出された。廐棄用土壌と考えられる。またS K02はS D07を切っている。

S K03 調査区北西部に検出された長径1.6m、短径1.3m、深さ0.2mの橢円形の土壙である。検出面より約1.0mさげ、その中央をさらに0.1mさげた段状の断面をもつ土壙である。底部よりピットが1か所検出された。出土遺物は特になく、性格は不明である。

S D07 調査区西部中央に検出された遺構で、調査拡張より東へ流れ直角に屈曲し、北へ流れる。さらに直角に屈曲して東流する。検出状況よりS D17へ連続するものと思われる。幅の広いところで4.0m、狭いところで0.8mとなる。最初の屈曲部では、水が滞留していたようで、埋土は還元された状態であった。

北流する部分では、長さ約2mにわたって、河原石と土師器・須恵器が集積した状態で検出された。溝の機能が終わった段階で、これらを廐棄したものと考えられる。

またS D07の埋土を取り除くと、底面から10数か所のピットが検出された。

S D05 調査区中央部で検出された。幅0.2~0.7mの東流する溝で、土師器・須恵器等が出土した。

S D10 調査区北部で検出されたY字状の溝である。幅2m、深さ0.1~0.2mの規模をもつ。埋土には比較的多く礫を含む。土師器・須恵器等が出土した。

S D24 中央部で北流する幅0.7m、深さ0.1mの溝である。埋土には比較的多くの炭を含み、土師器・須恵器が出土した。

S T01 調査区北端に検出された木棺墓である。主軸は、磁北より約30度東に振る。掘形の規模は、長辺1.25m、短辺0.45m、深さ0.2mである。

木棺の蓋板に達するまで掘形内に流入した遺物包含層とその下層に灰色の粘質土とがある。これを削除すると蓋板があらわれる。蓋板の残存状況は悪く、棺の西半部に遺存するにすぎなかった。残された節の部分から復元される蓋板の厚さは、約2cmである。

蓋板及び棺内の土を取り除くと底板及び東西両側板・南北両小口板が検出された。西側及び南北の小口板は残存状況が悪く、それぞれの下半部の一部が検出されるにとどまり、木棺の形状が判明する程度のものであった。

東側板は残存するが、下半部が腐植し崩れたもので、側板としての形状を復元し難い状態であった。

底板は比較的残存状態がよく、棺の形状を復元するに足るものであった。底板の北端に木目の異なる板材があり、その板上に土師器皿4個と須恵器塊1個が検出された。目の異なる板は、折敷の類かもしくは、箱状の板材の一部と考

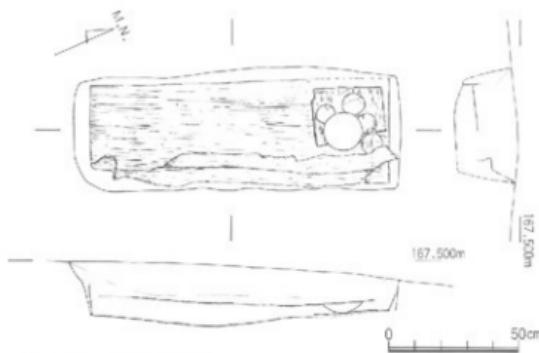
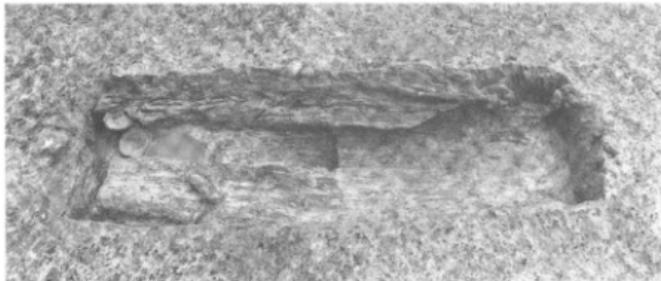
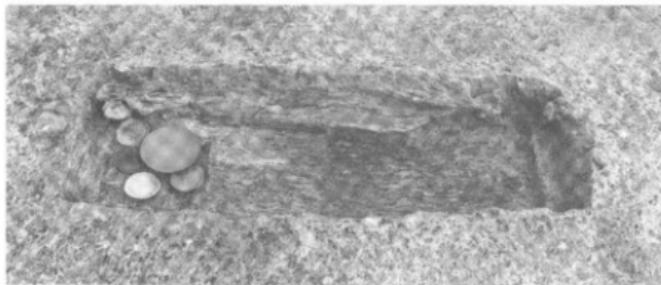


fig. 253 S T01実測図

fig. 254 S T01

fig. 255 S T01
蓋板除去後

えられる。遺物は、須恵器の碗を取り囲むように土師器の皿がおかれていた。

木棺は、長辺1.15m、短辺0.4m、深さ0.2mの大きさと考えられる。木棺各部材の組み合わせは不明な点が多く、今後検討したい。

小 結 検出された遺構は、建物とそれに伴う溝及び土壌等と考えられる。兄崎らしのよい高燥な地理的条件は、建物を建て、人が住むに適した場所であったと考えられる。出土遺物から、ほぼ13世紀代後半と考える。

また前述のように、調査区北半部では、遺構の密度は希薄であり、南半部、特に西部には、遺構・遺物が集中する。通称蓮花寺鼻の尾根頂部は、今回調査区の西部にあたり、遺跡の中心地区を求める上、S B01及びSK02の西方部になると考えられる。

21トレンチ 園場整備の区画上切り取られる圃場に設定した4m×27mの調査区である。

層 序 層序は、耕土・床土下に、中世遺物包含層があらわれる。その下層に粘質の砂泥層の2層がある。上記の3層には微量ながら遺物が検出された。これらを除去すると溝（SD01）が検出される。層序より古墳時代から奈良時代の溝と考えられる。この下層に弥生時代の落ち込み（SX01）が検出される。SX01は地山層となる青灰色砂泥層に切り込んでおり、SD01に切られる。

SD01 幅3.1m、深さ0.6mの溝で、埋土は砂であった。砂層内に木片が数多く見られたが、特に加工材は出土しなかった。層序でも触れたが、溝内よりの出土土器はなく、時期を決定することはできなかった。

SX01 弥生時代の性格不明の落ち込みである。調査区南西隅より弥生土器が出土したが、表面の摩滅が著しく時期は決定できなかった。

3.まとめ 59年度園場整備対象地区での発掘調査総面積は、約3,230m²である。試掘調査で明らかになったように、対象地区には、谷状地や氾濫原等の一部を除き、ほぼ全体に中世遺物包含層と遺構が存在する。

また当初予想されなかつた、弥生時代（21トレンチ）、古墳時代（1トレンチ）、奈良時代（22トレンチ）の遺構・遺物が検出された。さらに、14トレンチでは掘立柱建物とともに、市内でも稀少な、中世の木棺墓が検出された。

さらに工事の設計変更等で、遺跡の破壊を最小限に抑えることができた。また、以上のように数多くの成果をあげることができ、北神地域での弥生から中世に至る当時の人々の生活をあとづける数多くの資料を得ることができた。

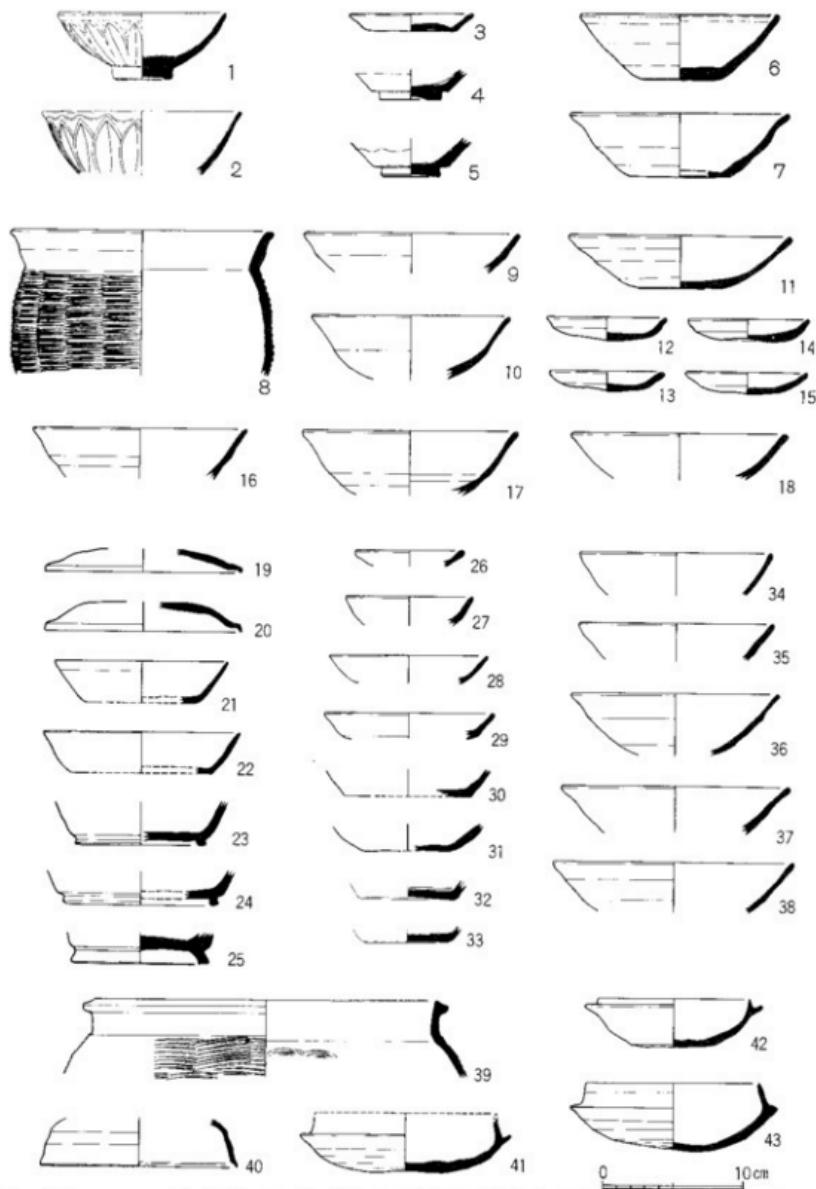


fig. 256 (1~7.14トレンチ包含層、8.9.14トレンチ SD10、10.14トレンチ SD12
出七遺物実測図 (11~15.14トレンチ ST01、16~18.14トレンチ SX01、18~43.1トレンチ包含層))

しおた 21. 塩田遺跡

1. 調査経過 塩田遺跡は、道場町塩田地区の圃場整備事業に伴い、昭和56年度より発掘調査を実施している。昭和56年度調査では、土師器、須恵器、瓦器、中国製白磁等が出土し、翌年度調査では、弥生時代中期の土器、石庵丁や中・近世の遺構・遺物が出土した。さらに昭和58年度には、弥生時代後期の方形住居址も検出された。

本年度は、圃場整備に係る部分にテストピット等を設定し、調査を実施し、掘削が行われる支線排水路部分及び沖代川改修工事により破壊される部分について発掘調査を行った。

2. 調査結果

I トレンチ トレンチ中央やや南寄りの所で、南西～北東に流れる2条の自然流路を検出した。南の溝は幅約1m、深さ0.3～0.4mを測る。溝内埋土の上層より6世紀中頃の須恵器壺身片が少量出土した。北のそれは幅約2m、深さ0.3～0.4mを測る。溝内堆積土中から須恵器小片が出土した。また包含層から12～13世紀代の須恵器が若干検出された。

II トレンチ トレンチ東端から5m毎に小地区を設定し、全体を東から1～21区に分け、発掘を行った。

1～8区からは溝及び土壤等を検出したが、遺構内出土土器はなかった。12～16区にわたり約50か所のピットを検出したが、建物としてまとまるものも認められず、遺構に伴う遺物も検出されなかった。14区では幅約0.4m、深さ約0.1mの北西～南東方向の溝が検出され、埋土よりサヌカイト製凹基式石鏃が1点出土した。18区でも幅約0.4m、深さ約0.1mの溝があり、埋土よりサヌカイト剝片1と共にサヌカイト製凹基式石鏃が1点検出された。20～21区では南端で東へL字形に曲がる幅約2.2m、深さ約0.7mの南北方向の溝を約5mにわたり検出した。埋土上層よりサヌカイト剝片が1点出土している。

III トレンチ のほぼ全城に包含層が認められ、12～13世紀代の須恵器、土師器、中国製白磁等が出土した。さらに11区より銭貨（銭種不明）1、12区より石庵丁1、17区よりサヌカイト製凹基式石鏃1、19区から銭貨（銭種不明）1及びチャート製平基式石鏃1が出土した。この内、サヌカイト製、チャート製石鏃と前記溝内出土サヌカイト製石鏃は、縄文時代に属するものと考えられる。

IV トレンチ 同様北から1～8区に分け、発掘を行った。

遺構としては8区にピット群が認められたが、これに伴う遺物は検出されなかった。包含層からは中世の須恵器、土師器、瓦器、中国製白磁等が出土し、



fig. 257 トレンチ位置図

特に2区よりサヌカイト製凹基式石鏃1、8区より鐵刀片が検出された。石鏃はIIトレンチ出土石鏃と同じく縄文時代のものと考えられる。

IVトレンチ 前二者同様西から東へ1～9区とし、発掘調査を実施した。遺構は土壙2、溝2、木棺墓1、掘立柱建物1及び幅約10m前後の浅い自然の落ち込みを検出した。

SK02 南北約1.2m、東西約1.0m、深さ0.4mの隅円長方形を呈する土壙で、須恵器甕1、同塊2、土師器皿7以上、土師質羽釜1、瓦器塊5以上、中国製白磁碗1が、木簡1、種子2、木片及び自然石（花崗岩、凝灰質砂岩、珪化木）と共に出土した。土壙内埋土の最下層に木簡、種子、木片があり、その上に横

方向から押しつぶされた状態の羽釜が検出され、その他の土器類は、土壤周辺より中央部へ向かって投げ込まれた状態にあった。木筒は上端より5.3cm残存し、以下及び左側辺は欠失している。上端より5mm下った側辺に切り込みが作られる。厚さは2.5~4mmである。文字は1字以上あるが、判読できなかった。土壤の時期は12世紀後半~13世紀初頭と考えられる。

S K 03

南北約2.1m、東西約3.0m、深さ約0.25mの規模を有する隅円の不整長方形で、多量の自然石（花崗岩、凝灰質砂岩、珪化木）と共に須恵器塊1、同壺底部1、土師器皿10以上、瓦器塊5以上が出土した。須恵器塊、同壺は完形とはならないが、瓦器塊、土師器皿には完形であるものが多く、特に後者は土壤北東隅に重なった状態で出土した。さらに自然石の中には火を受けているものが約半分あり、この土壤の性格が単なる破損品の放棄場所とは考えられないことを示している。

S T 01

S K 02の北東約5mの所で検出された主軸を東14度30分北にとる木棺直葬墓である。墓域は長さ約2.2m、東端幅約0.78m、西端幅約0.95m、深さ約0.2mを測り、南東隅が張り出す隅円長方形を呈する。北・南及び東壁はほぼ垂直に近い面を成すが、西壁はゆるやかに傾斜している。木棺は墓域のやや北に片寄って安置される。

底板は、主軸に直交して据えられた3本の細い木棒上に置かれる。木棒は直径約3mm、長さ約60cm前後のものであるが、特に加工は観察し得る限り認められない。底板との関係も腐朽と、底板の取り上げを行っていないこと等から明らかではない。底板は現在4枚の板となっているが、本来は1枚板と思われる。現長約1.8m、現幅約0.45mを測る。北側板は長さ約1.83m、幅約0.25m、南側板は長さ約1.63m、幅約0.28

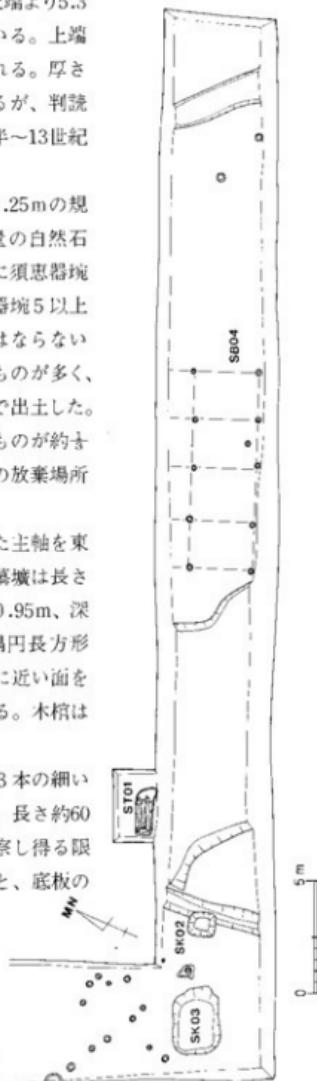


fig. 258 Nトレンチ平面図

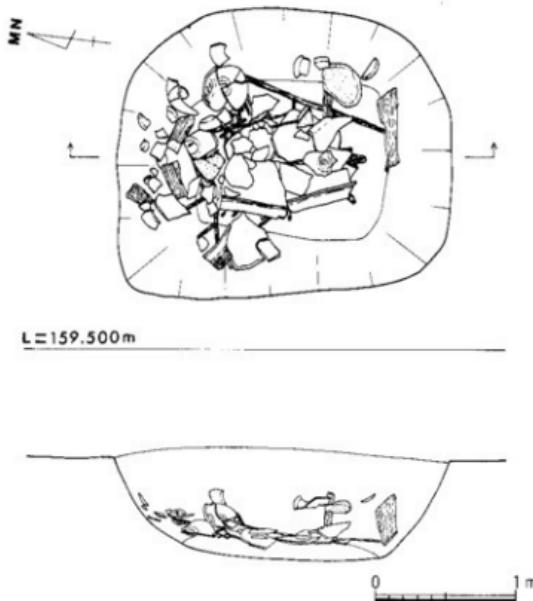


fig. 259 SK 02実測図

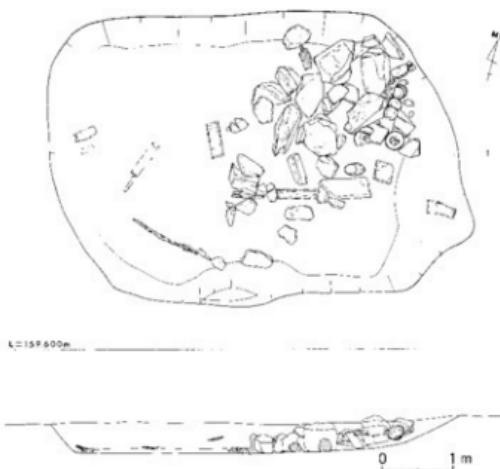


fig. 260 SK 03実測図

mを測る。南側板下辺近くには、辺に沿って約0.5~0.6m間隔で貫通する小孔が3か所穿たれているが、北のそれには存在しない。小孔はその位置よりみて、底板との接合と何らかの関係を持つものと考えられるが、底板南辺の残存状態が極めて悪いため、それを明らかにすることはできない。両小口板は検出されなかった。蓋板についてもそれと考えられるものが殆ど棒状になって検出されたが、蓋板と確定できなかった。

人骨の遺存状態も悪く、大腿骨と思われるものが、棺内西半の底板上から検出されたにすぎない。また歯齒（馬か）が底板より0.2m浮いた状態で出土し、墓に伴う何らかの祭祀に関係するものと考えられた。

ガラス小玉2が副葬品として底板東端より約0.3m西の北辺寄りで検出された。一方のガラス小玉は透明でうすい緑色を呈し、最大径0.615cm、厚さ0.435cmを測り、他方は風化のため不透明でうすい黄緑色を呈している。最大径0.720cm、厚さ0.420cmを測る。2個のガラス小玉の周囲には直径約5cmの範囲に白色の物質があり、ガラスが風化したものと考えられる。

墓壇の南東隅に口縁部を下にした土師質鍋が、壇底に接して検出された。出

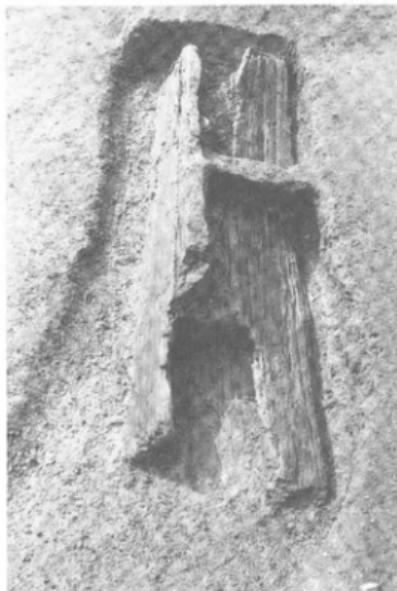


fig. 261 S T01

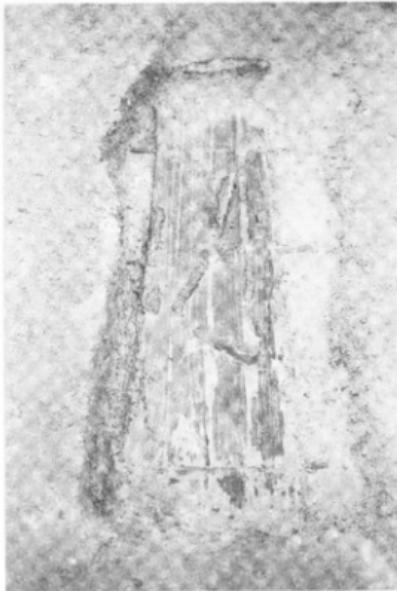


fig. 262 S T01底板と人骨

fig. 263 SK.02

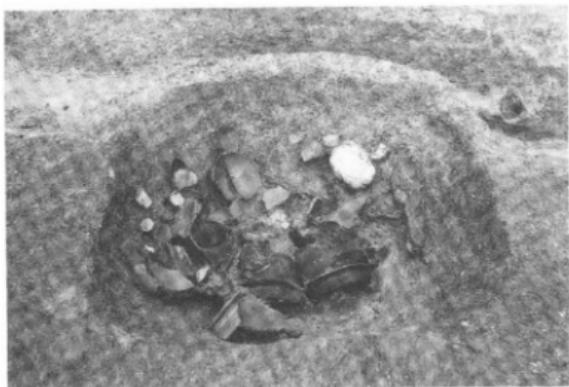


fig. 264 SK.03



土状態から供獻土器と考えられる。

S B 04 IVトレンチのほぼ中央部で検出された桁行4間、梁行1間以上の東西棟の掘立柱建物で、規模は8.7m×2.8m以上を有する。柱穴内より中世の須恵器塊小片が出土したが、時期は明確ではない。

Vトレンチ 造構には、土壙、柵列、溝等がある。

S D 07 Vトレンチ南端より北へ約18m附近より一部調査地外となるが、長さ約56mにわたり検出した溝状造構で、現沖代川に平行して流れる。幅は2m以上、深さ約0.3mを測る。溝堆積土は大きく2層に分かれ、上層の暗灰色粘質土中に多量の土器を含んでいた。土器は溝がある程度埋没した段階に、ほぼ同時期に投棄された状態にあった。

出土遺物には須恵器捏鉢、同塊、同壺、同小皿、土師器皿、同羽釜、同鍋、瓦器塊、中国製白磁碗があり、須恵器塊には完形のものが含まれる。須恵器塊、同小皿の外面に墨書きが認められるものがあり、1つは「東□」と判読できる。また南端より北へ約5m附近で、長さ約80cm、幅約3cm、厚さ約0.5cmの刀状木

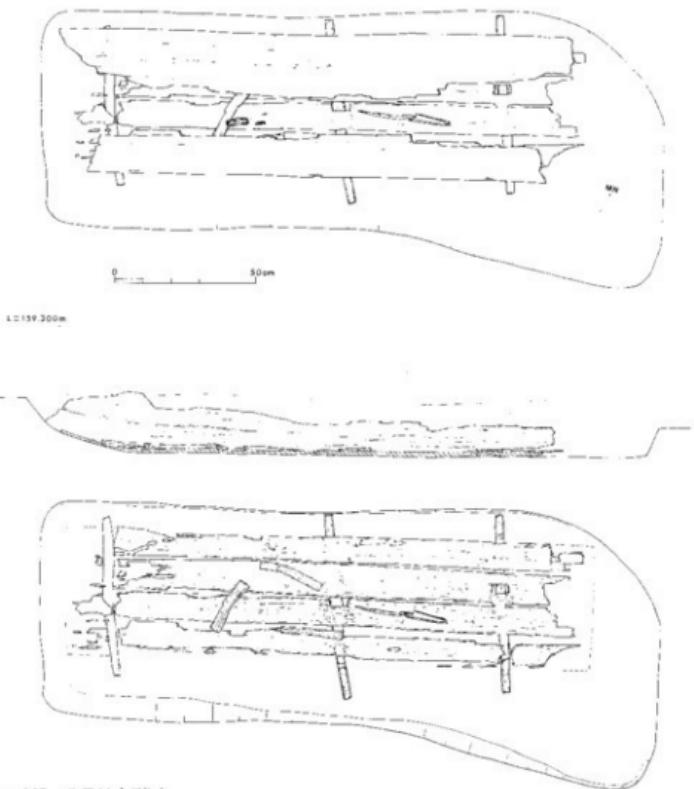


fig. 265 S T01実測図

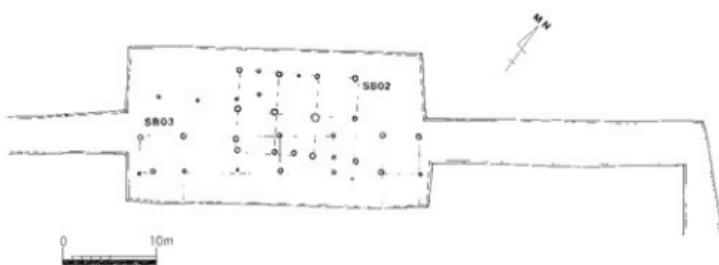


fig. 266 VIトレンチ S B02、S B03平面図

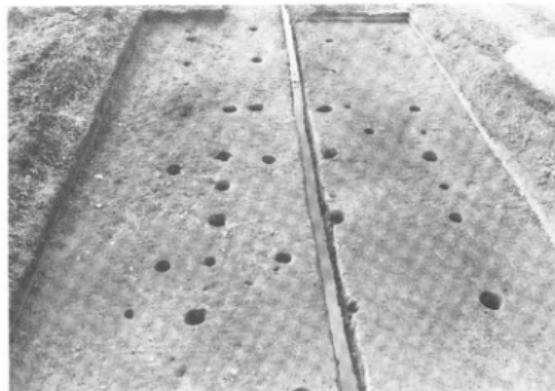
製品が出土した。出土遺物の時期は12世紀後半～13世紀初頭と考えられる。

VIトレンチ トレンチ東端近くで掘立柱建物2とピットが検出された。中世包含層は掘立柱建物部分に認められ、これより西ではなく造構も全く認められなかった。

S B02 桁行3間、梁行2間の東西棟の掘立柱建物で規模は6.2m×4.4mを測る。柱穴内より土師器皿、瓦器塊、同小皿が出土した。

S B03 桁行6間、梁行1間以上の東西棟の掘立柱建物で、規模は14.4m×2.0m以上を有する。柱穴内より土師器皿が出土した。S B02との前後関係は明確に把握できないが、共に13世紀を前後する時期に属すと考えられる。

fig. 267 S B02、S B03



VIIトレンチ 遺物はトレンチ南半部に包含層が認められ、12～13世紀代の須恵器、土師器、中国製白磁等が出土した。造構は、桁行2間、梁行1間以上の掘立柱建物が1棟検出された。規模は5.5m×1.5mを測る。時期は明確ではないが、造構を覆う包含層に近世遺物を含まないことより、中世以前に属すものと考えられる。

VIIトレンチ 造構には、溝、土壤、ピット群がある。

トレンチ西端は搅乱及び激しい湧水のため明確に造構をとらえられなかったが、溝状造構の東肩部を検出した。規模は断面観察の結果をあわせ考えて、幅約6.8m、深さ約0.8mとすることができる。この大溝は弥生時代の包含層を切って掘り込まれており、埋土最下層より石庵丁2、同未製品2、楔形石器、不定形刃器類10、サスカイト剝片、タタキ石1及び弥生中期土器と共に、5世紀代の小型丸底壺が1点完形で出土した。埋土内にこれより時代の下る遺物は全く含まないことより、大溝は5世紀代に属すと考えられる。またこれと同一の溝と思われるものが、トレンチ北東部で検出されている。

大溝の西に接し、これに一部破壊された状態で、幅約0.9m、深さ約0.4mの溝が検出された。埋土より弥生時代中期中頃の遺物が出土した。

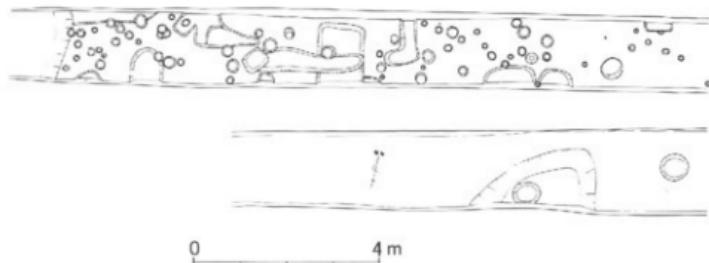


fig. 268 VIIトレンチ平面図

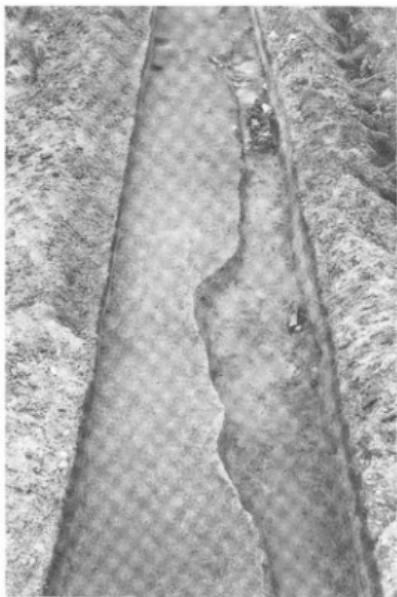


fig. 269 SD07



fig. 270 VIIトレンチ

大溝東肩より西、12~13mまでの範囲にはピット、土壙、溝が密に検出された。これらは殆どが弥生時代に属すると考えられる。

遺物はトレンチ西端から約30mまでに多く含み、東・北へいくに従いその量を減じる。遺物包含層及び遺構より、弥生土器と共に石庖丁6、同未製品20、石鎌19、石錐1、楔形石器・不定形刃器類47、チャート製刀器2、管玉1、磨製石器片（石斧か）1が出土している。

区トレンチ トレンチ南半部に関しては、耕土・床土を除去すると地山が現われたが、遺構は全く認められなかった。

北半部は北へ向かい地山が傾斜しており、表土下約0.5mで北端より約10mの範囲に黒色粘質土の堆積がみられた。この層より石庵丁4、同未製品6、石鎌8、石錐4、楔形石器・不定形刃器類28が弥生土器と共に出土した。遺構は検出されなかった。

T.P.22 幅約0.6m、深さ約0.5mを測る断面U字形の東西溝1とピット、土壤を検出し、溝内から弥生時代中期の土器が出土した。また遺構をおおう厚さ約0.2mの弥生時代遺物包含層が認められ、石鎌1、楔形石器・不定形刃器類2が出土した。

fig. 271 T P22



T.P.23 遺構は東南隅のピット1のみであったが、厚さ約0.2mの弥生時代の包含層から多量の上器と共に石庵丁4、同未製品1、石鎌9、石錐2、楔形石器・不定形刃器類21及び石劍と考えられる小片が出土した。

T.P.24 幅約1m、深さ約0.4mの南北方向の溝1、幅約0.6m、深さ約0.1mの南西～北東方向の溝1、直徑約0.8m、深さ約0.4mの土壤1及びピット等を検出した。遺構内からは弥生中期土器が、厚さ0.1～0.2mの弥生時代の包含層より石庵丁1、同未製品3、石鎌9、石錐3、楔形石器・不定形刃器類28が土器と共に出土した。

T.P.25 遺構はピット2が検出された。弥生時代の包含層より石庵丁1、石鎌1、楔形石器・不定形刃器類4及びチャート製刀器1が土器と共に出土した。

- T. P. 26 幅約0.2m、深さ約0.16mの北西～南東方向の溝1及び土壌、ピットを検出した。弥生時代の包含層より石鎌3、楔形石器・不定形刃器類6が出土した。
- T. P. 27 造構はピット3のみ検出された。弥生時代の包含層は殆どなく、地山直上より石鎌1、不定形刃器1が出土した。
- T. P. 28 浅い落ち込みとピットが検出された。弥生の包含層と同質の黒色粘質土は造構内に堆積するが、包含層はみられなかった。地山直上より楔形石器・不定形刃器類が出土した。
- T. P. 29 ピット1が検出され、中より石鎌1、サスカイト剥片が出土した。弥生包含層は認められなかった。
- T. P. 30 北半部で0.2～0.3mの落差を持つ、自然地形と考えられる落ち込みが認められた。落ち込み内埋土及び弥生時代の包含層より石庵丁1、同未製品3、石鎌11、石錐2、楔形石器・不定形刃器類28及びチャート製刃器1が出土した。さらに上層の暗灰色粘質土層より12～13世紀代の遺物が出土した。
- T. P. 33 造構は検出されなかつたが、表土下約0.4mの所に厚さ約0.05mの弥生時代の包含層があり、石庵丁未製品1、石鎌2、楔形石器・不定形刃器類14が出土した。
- T. P. 35 最大幅約1.6m、深さ0.3mの南西～北東方向の溝1を検出した。黒色粘質土より楔形石器・不定形刃器類4、暗灰色粘質土よりサスカイト剥片が少量出土した。
- T. P. 39 造構は認められなかつたが、表土下約0.7mにある厚さ0.1mの炭を含む暗灰色粘質土より石鎌1が検出された。
- T. P. 51 表土下約0.8mにある厚さ約0.2mの黒色粘質土より若干の弥生土器が検出された。造構はみられなかつた。
- T. P. 52 約0.6m×約0.8m、深さ約0.2mの土壌及び落ち込み、ピット等が検出された。造構内より弥生土器の小片が、弥生時代の包含層より石庵丁未製品2、石鎌1が出土した。
- T. P. 53 造構は検出されなかつたが、表土下0.4～0.5mにある厚さ約0.1mの灰色粘質土より石庵丁未製品2が出土した。
- T. P. 56 耕土、床土を除去すると造構面に達した。造構は地山をベースとする竪穴式住居址1、土壌2、ピット群が検出された。竪穴式住居址は南北約2.2m、東西約2.8m、深さ約0.18mを測る小型のもので、中央に径約0.6mのが持つ。炉は床面を数cmくぼめただけの構造である。周壁溝は、南辺東寄りと、北東隅部を除き認められる。南辺の周壁溝がとぎれる部分は外より内に向かってスロープとなっており、この箇所が出入口と考えられる。住居址に伴う柱穴は、炉をはさんで南北に並ぶ1対のピットがそれに相当するものと思われる。東半の

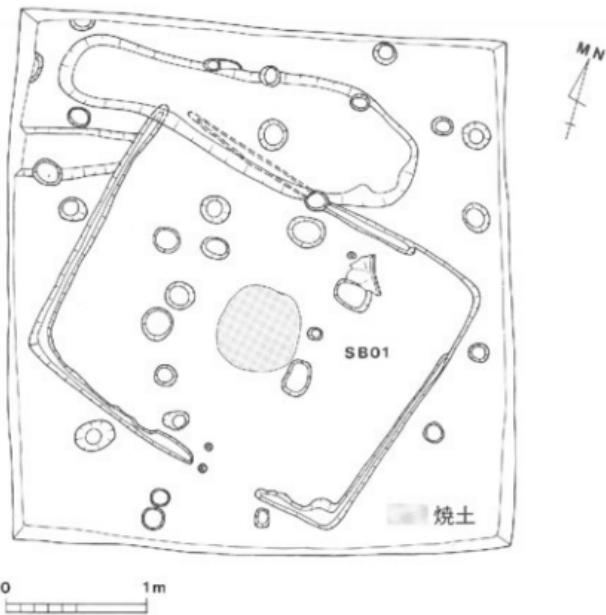


fig. 272 TP56平面図

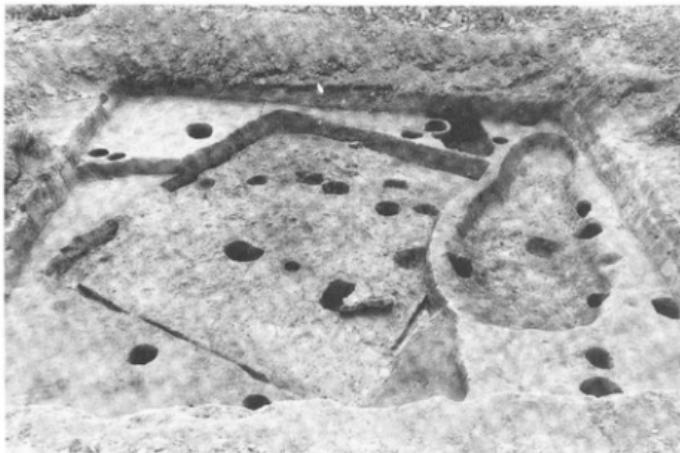


fig. 273 TP56、SB01

床面上より赤色顔料の細粒が極く少量検出された。また彫形土器が床面東北部より出土した。埋土中より石庵丁2、石鎌5、楔形石器・不定形刃器類2、砥石1が検出された。住居址の時期は、床面上の彫形土器より弥生時代中期中頃と考えられる。

住居址北辺の西半部を切る長さ約2.6m、幅約0.9m、深さ約0.2mの不整形土壙からは弥生土器と共に石鎌、不定形刃器が各1出土した。

計29検出したピットには弥生土器の小片を含むものもあるが、大部分は無遺物である。ただし、埋土は弥生の包含層の黒色粘質土と同質である。

T. P. 57

遺構は検出されなかつたが、表土下約0.4mにある厚さ0.2mの暗灰色粘質土より中世の須恵器と共に石鎌2、楔形石器・不定形刃器類2、サヌカイト剣片が出土した。

5.まとめ

調査の結果、Ⅱ・Ⅲトレンチで縄文時代に属すと考えられる石鎌が少量ながら検出された。これより当時の集落が近くに存在することが推定できた。

Ⅷ・Ⅸトレンチでは弥生時代を中心とする遺構・遺物が検出され、遺構では調査面積の制約もあってまとまつたものはなかつたが、多数のピット、土壙、溝の検出により集落址の存在が確認できた。遺物では石庵丁がⅧ・Ⅸトレンチを合わせ製品12、未製品28を数え、包含層残存面積に比して多量に出土している。この事実より石庵丁生産が当村落の消費のためのみでなく、他村落への供給をも目的としていたことが推定される。弥生土器については未整理であるが、前期末から中期後半までのものが認められ、量的には中期前半～中葉のものが大半を占めるようである。

Ⅸトレンチでは5世紀代の布留式土器、Ⅰトレンチでは6世紀代の須恵器もみられ、古墳時代の集落址が存在する可能性が強まつた。

I～VIIトレンチでは主として12～13世紀代の遺構・遺物が出土した。IV・VI・VIIトレンチでは、掘立柱建物やSK02・03、Vトレンチでは、多量の土器が投棄された溝が検出されたこと等から、附近が当時の集落であったことが確認された。さらにIVトレンチでは建物群と時期を相前後する木棺墓も発掘され、集落と墓地との関係を知る上で重要な資料が得られた。

以上のことより当遺跡がこの地域の歴史を解明する上で、非常に重要な位置を占めることが明らかとなつた。

遺跡の範囲については、弥生時代のものは、Ⅷ・Ⅸトレンチを中心としてより南方に拡がることが遺物の散布から十分推定でき、中世のものについても遺構・遺物の分布状況から、より南に広がりを持つことが予想される。

なお、IVトレンチで出土した木棺墓は、切り取り、移設保存の措置を講じた。

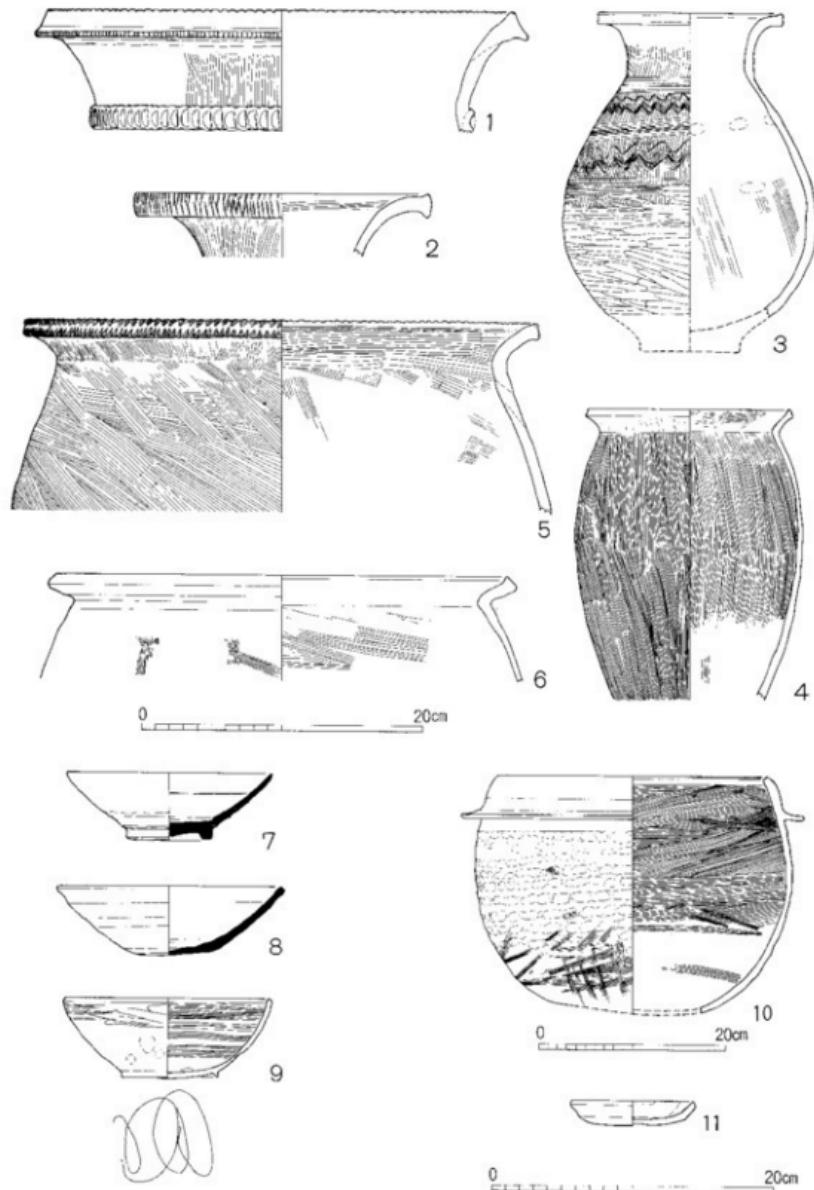


fig. 274 出土土器実測図 (1~5. T P50、6. T P17、7~11. SK02)

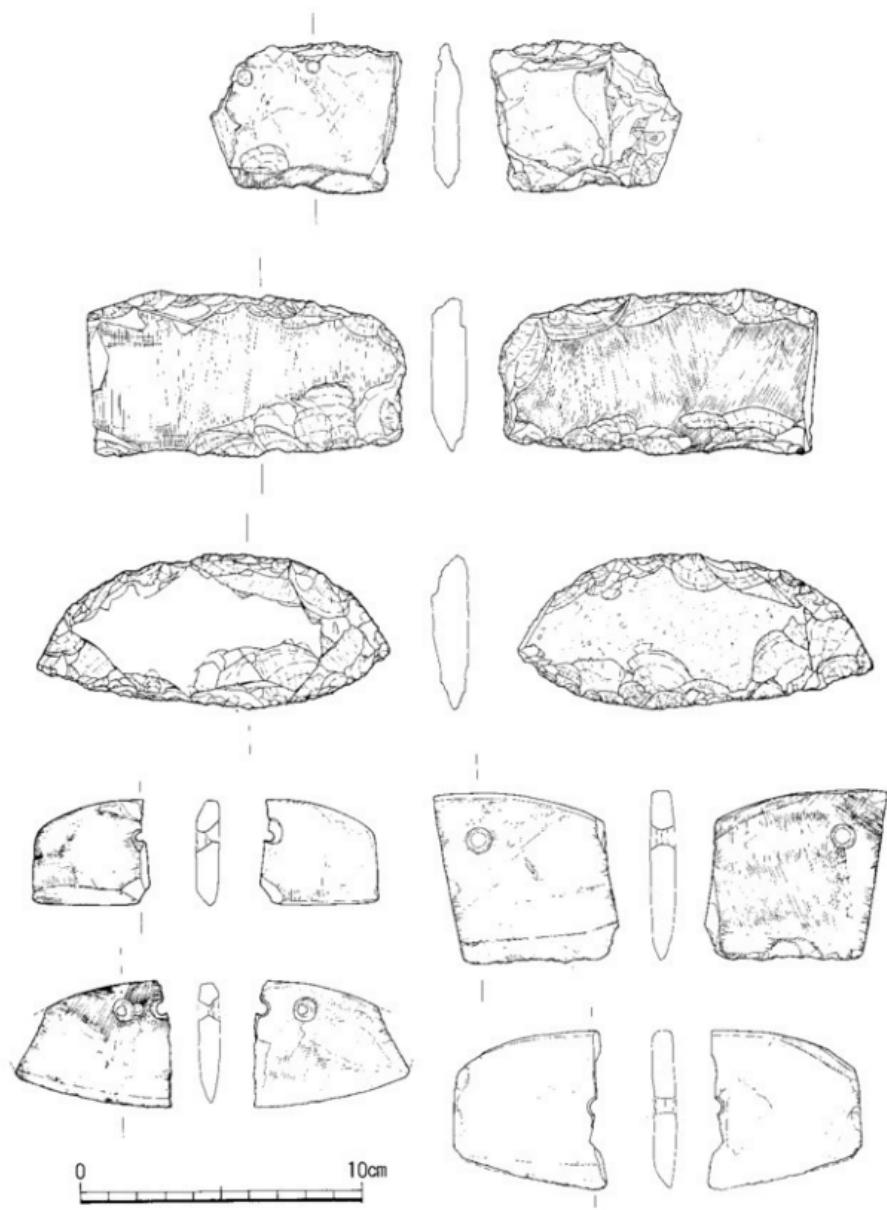


fig. 275 区トレンチ出土石庵丁実測図

昭和59年度 神戸市埋蔵文化財年報

昭和62年3月25日 印刷

昭和62年3月31日 発行

発 行 神 戸 市 教 育 委 員 会

神戸市中央区加納町6丁目5番1号

印 刷 大 神 印 刷 株 式 会 社

神戸市中央区港島中町2丁目2番1-5分銅